
希望の果てに・・・

若月 椎名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希望の果てに・・・

【Nコード】

N8885I

【作者名】

若月 椎名

【あらすじ】

国際超能力開発学校に通う主人公。彼にはやらなければいけない使命があった。そして彼にはさまざまな秘密があった。あるときは高校生。あるときは国際超能力開発学校の理事長？だったり。そのほかにも彼にはさまざまな顔がある。さあ物語はどんな方向に進んでいくのだろうか・・・正直、作者にもわかりません（笑）< :

「プロローグ」(前書き)

とりあえずちよつとだけ作ってみましたが、なにか感想ありましたら、遠慮なくお願いします。(よくありそうな感じのアレなんですルーして貰っても結構です。)まあ作者の自己満足作品ですので、今後の設定も主人公最強、的なものになっていくと思います。

くプロローグく

「なんでだよっ・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

大粒の雨が降り注ぐ中で、彼はそこに居た。

彼の名は、かみくら神蔵 ゆう悠。

悠は国際超能力開発学校の中等部に通う3年生だ。といっても今は卒業し今年から高等部に上がる事になっていた。

年は15歳、身長は学年の中ではやや高めの175cm。

瞳はブルードイヤモンドのような青く透き通った色をしている。

髪は黒っぽい茶髪でやや長く、後ろで一つに編んでいる。

そして悠は今、絶望の淵に立たされている。

悠が立っている場所はとある墓地の中にある、小さな墓石の前。

雨音がひどく、悠の叫びはかき消される。しかし、悠は叫び続けた。

「・・・・・・・・なんでっ・・・・・・・・なんでっー・・・・・・・・」

大粒の涙と共に・・・・・・・・

くプロローグく（後書き）

私は誰もが皆、最後の最後で幸せになる設定が大好きです。でもそれはいろんな意味で普通じゃないと思います。

アニメって何ですか？小説って何ですか？

それはただの視覚的な物でしかないのでしょうか？

一つ一つの本の中にはアニメの中にはそれを作った人たちの心がこもっています。思いが詰まっています。そしてそれらはその人にしか作れないストーリーです。

私は自分の好きなように本を作りたいと思っています。

こんなダメダメな私ですが、なにとぞよろしくお願いします。^^：

少年の過去（前書き）

とりあえず急いで書いたので誤字等がありましたら連絡お願いします。

文才無くて本当にスイマセン。

少年の過去

墓地の中で泣き叫び続ける悠。

この日、悠は大切なものを失ってしまった。

悠には神楽坂 かぐらざか 命 みこと という名の幼馴染が居た。

正直言つて命はとてもモテた。それほど高くない身長に、腰までは届くだろう淡いピンクの長髪。

そして日に当たったことが無いような白い肌に、赤く透き通った瞳に、整った顔立ちをしていた。

しかし命はどれだけ告白されても誰とも付き合わなかった。それには理由がある。

幼い頃からよく一緒に居た悠と命は中学生になる頃には、当然のごとくお互いを意識し合っていたのだ。

そう悠は命が好きで、命は悠のことが好きだった。まさに両想い。

しかし悠が中学校2年生にあがった時、突如異変が起こった。

それは突然だった。まさに一瞬。刹那の瞬間。

気づくと辺りは血の海と化していた。

なにが起きた……？

悠は何が起こったのかさえわからなかった。

しかし目を見開いてよく見ると悠の眼前には、頭から下が何もかも飛び散り、

無惨な姿になった両親が居た。

「な．．．なっ．．．な．．．ん．．．で．．．」

わからない。何もわからない。ただひとつだけわかったのは、両親が死んだという事。

「うっ……うっ……うわわわあああああああ——」

1.

悠は喉が切れるような悲しみの叫びとともに意識を失った。

ゝ少年の過去ゝ（後書き）

今回の設定はこの事件の3ヵ月後から始めようと思います。

本文短くてスイマセン。

更新率Upさせるように頑張ります。 ^^ :

く最愛の死く（前書き）

なんか・・・すいません。^^
:

く最愛の死く

あの醜く悲しい事件から3カ月の月日が経った………

ガラガラガラッ。

勢いよく、部屋の扉が開いた。

「ゆうくん。お見舞いに来たよ」

ここはとある病院の一室。

静かな人の気配もしない病室に元気な女の子の声が響き渡る。

少女は静かな病室で、視線をベッドに居る少年に注ぐ。

少年は上半身を起こして外を眺めている。

少女はそんな少年をどこか寂しそうな、それでいて悲しそうな表情で見る。

病室の扉のすぐ隣に『入院患者名・神蔵^{かみくら} 悠^{ゆう}』と書かれた札が掛かっている。

これが本当にあれほどまでに元気だった悠なのだろうか。

悠のブルーダイヤのような青い瞳には微塵の輝きも無い。

わかりやすく言えば今の悠はただの人形なのだ。

喜び、悲しみ、怒り、驚き、恐怖、その他多くの感情という物が何一つ見当たらない。

ただ生きているだけ、それだけなのだ。

命はそれでも悠に話しかける。

「今日はね。新しい力が使えるようになったの、見ててね」

そういうと命は悠の手をとった。

悠は少しビクツとしたが特に何の反応も示さない。

「いくよ」

一瞬だが、光が病室を照らした。

そして、命が握っていた悠の手のひらの中に一輪の花ができた。

「えへへ今はこれが限界かな。」と命は話す。悠に自分の声が届いていないと知りながら……

そしてあの事件から一年と少しの月日が流れた……

そして物語は墓地で叫ぶ悠のところへ戻る。

悠が見つめる墓石に刻まれた名前。『神楽坂 命』

そう『神楽坂 命』、確かにそう刻まれた墓石。

なぜ、命の名が墓石に刻まれているのだろうか。

実は命には特別な力があつたのだ。

命が過去に悠の病室で使った力は【創生能力】と言って、世界中でも、一人か二人いるかないかのまれな力だったのだ。

あの時にできた花は、作り出したと言うよりは生まれさせたに近い。ただ単純に物を作り出すだけならば【創造能力】を持っている者ならば容易にすることができる。

しかし命の【創生能力】は【創造能力】と違い、生み出す事ができるのだ。

わかりやすくいえば【創造能力】は物などの無機物しか作り出せないのである。

しかし、【創生能力】を持つ命は有機物などの生命を作り出すことができるのだ。

そして命は一年という歳月を経て、悠の失われた感情を取り戻すために悠自身の心を創生させたのだ。

創生と言っても悠の心を取り戻すためのきっかけを与えたに過ぎないが、悠は確かに少しではあるが感情を取り戻していった。

そして、命は死んだ。

まだ感情が完全に治っていない悠の目の前で死んだ。

感情が戻っていない悠にとっては、命の死は取るに足らないものだった。

命の死因は極度の疲労による過労死。

まだ16才にもなっていない少女が普通、過労死などするはずもなかった。

しかし少女は確かに疲労しやつれきっていた。感情を失った少年の感情を少しながら創生させたのだ。

それはまだまだ力の未熟な少女にはきついものであつたのだろう。

それから悠は命が死んだ3ヵ月後に全ての感情を回復させた。

そして全てを知った。

命が自分を救い、そして死んだこと。

命の両親は悠に吐き捨てるように言った。

「娘を……娘を返せ。お前が……お前が娘を殺したんだ。この人殺しめ。なんで……なんで娘が責めのような奴のために死ななければいけないんだ……」

少年は言葉も出ない。いくら罵られようが悠は何も言い返せない。

命が……命が死んだのは俺のせいだ……

少年は雨が降り注ぐ墓地の前で叫び続けた。

く最愛の死く（後書き）

つまらない物語ですが読んでいただければ幸いです。 ^^

く力の片鱗く

命の墓の前で悠は決意する。

「俺はすでに死んでいた。しかし命・・・お前が俺に再び光を与えてくれた。ただの抜け殻だった俺を自分の命と引き換えにしてみただけで救ってくれた・・・なぜだろう、俺が好きだった人はみんな死んでいってしまう。俺はもう誰も傷つけない。傷つけない。だから強くなる。好きな人を大切な人を守るために・・・強く・・・」

そして少年は墓地を去っていった・・・

ピピピピッピピピッ

携帯電話のアラームが静寂な空間に鳴り響く。

手際よくアラームをとめる。

そしてふかふかのベットから起き上がり大きく体を伸ばす。

「うーん・・・あーよく寝た」

今日から俺こと神蔵 悠は国際超能力開発学校・高等部に入学する事になっている。

と言っても、入学式はとつくの昔、二ヶ月前に終わっていた。俺はちょっとした用事があつて、この二ヶ月間一度も学校に行っていないつまりは今日が初めての登校と言うことだ。

用事と言うのはちょっとした会議だ。

実は二ヶ月前、俺が食料買出しのために道を歩いていたらスーパーの裏道で偶然にも3人組の不良に絡まれているいたいけな少女を発見してしまったのだ。

これはべた過ぎるだろ・・・と思ったが、さすがにほおってはいけない。

これ以上、人が傷つく姿を俺は見たくない。

そして俺の体は勝手に行動していた。

「なっ、なんだよお前」

髪の毛が無いいかにも不良ってかんじの一人がメツチャ睨んでくる。

あーやめてくれ。そんな怖い目で見ないで。ボクチビツチャウヨ。

などと思いつつ俺は不良どもに言い放つ

「ごみクズはごみクズらしくごみ箱に入ってくれ」

俺の一言に怒り狂う不良共。

「てっ、テメー！ぶっ殺す。」

何処から出したのだろう先程までは持っていなかったはずの金属バットを俺に向かって振りかざしてくる。

「【空間操作能力】か！！！」

【空間操作能力】それは物質をある種の別空間へと定めることができる力。この不良はバット等の凶器を自分で作り出した別の空間の中に入れているのだろう。さほど珍しい力ではない。しかしこの力を最大限まで扱えるようになる瞬間移動などが可能になる優れた力ではある。まあ俺には意味が無いが。

「くくくつ、さあどうする。土下座して許しを請うなら半殺しで許してやるぜー」

不良たちはもう勝った気でいるのだろう、ニヤニヤと笑っている。

土下座しても半殺しって……どっちにしろ死ぬじゃん。

とか思いながら俺は右手を前に突き出す。

「あゝん、何の真似だああああああああ」

金属バットを持っていた不良が吹き飛ぶ。

それを見た他の二人は声を合わせて叫ぶ。

「ひっ、ひいい」

一体何が起こったのか？ なにもわからない不良共は怖気づく。

「まだ……やるか？」

一応聞いてみた。俺は優しいから選択の余地をくれてやる。

すると残った二人は先程吹き飛んだ不良を担いで

「すっ、すいませんでしたっ」

と、いいながら走り去っていった。

逃げ足だけは速いようだ。

「さてと・・・」

俺も帰ろっかな〜と思った瞬間。

誰かが後ろから抱きついてきた。

ゝ力の片鱗ゝ（後書き）

なんか中途半端な終わり方でスイマセン。
感想待ってます。 ^^：

「かわいい少女はお嫁さん？」

いきなり後ろから抱きつかれ俺は動きを止める。

そしてゆっくりと後ろを振り向く。

なんとということでしょう。（劇的ビフォーアフターの発音で^^^:

そこにはさきほど不良共に絡まれていた美少女が居た。

さて……………どうしよう。

少女は思いのほか身長が低い。

きつと150cmってところか、歳も多分だが13、14歳ってところだろう。

オレンジ色の瞳に真っ赤な長髪。そして…………

胸は無い……………OTL。

貧乳はステータスだ。なんて言ってませんよ。

棒アニメの名台詞が危うく飛び出しそうでした。（もはや飛び出しちゃってるが^^:

少女は俺を上目遣いで見つめてくる。しかも抱きついたままだ。

そのまゝ時間が過ぎる。 1分・・・2分・・・3分・・・4分・・・5分・・・10分。

どうしよう・・・俺は別にそっちの趣味は無いんだが・・・な
どと思っていると少女が抱きついていた手を離して話し出した。

「あつあの。先程は助けていただいて本当にありがとうございます。私の名前は井剣 莉緒いつるぎ りおです。貴方の名前は？」

「俺の名前は神蔵 悠。君みたいなかわいい子が一人でうろついてたらさつきみたいにな奴らにまた絡まれるよ。これから一人であまりこころへんをうろつかないようにね。それじゃあバイバイ」

俺は足早に帰ろうとする。すると莉緒が背伸びをして俺にキスをした………

「なっ・なっ・なななな・何をつ!!!」

俺は腰を抜かして地面にしりもちをつく。

莉緒は顔を真っ赤にして物凄くことを話し出した。

「実は私——なんです」

俺にとってそれは核弾頭並みの衝撃だった。

なんでも莉緒の両親は世界でも5本の指に入る資産家で、多額の遺産を莉緒に残して亡くなられたらしい。

さらに莉緒は両親が設立した国際特殊警備隊の最高責任者にもなっ

てしまったらしい。

さらにさらに、国際超能力開発学校の理知長代理でもあるらしい。

しかも現在一人暮らしで、年を聞いてみたところ俺と同じだったことにもびびった。(ドンだけロリなんだよb y作者

そして困ったことに。莉緒は最後にこう言った。

「その・・・あの・・・私と・・・私と結婚してください!!」

まさに 核・爆・発

なぜ・・・なぜだーーーーーいつだ・・・いつこんなフラグがたつたんだーーーー

どうしよう・・・いきなり告白どころか、プロポーズまでされちゃったよ。

しかも初めて会った相手に言われちゃったよ。俺が戸惑っていると莉緒が携帯を出して、誰かに連絡をとっている。

すると30秒位したらメツチャクチャ長いリムジンが迎えに来たよ。

くかわいい少女はお嫁さん?」（後書き）

毎度の事ながら本文短くてスイマセン^^：
私も頑張っではいるんですがなにぶん時間がなくて。

ちなみに莉緒はシャ○に外見が似ています。

でも性格はツンデレではなく優しいヤンデレに近いです。

あつ作者はどMなんで、ヤンデレ設定強くすることもあるかもしれ
ませんが、そこはご愛嬌って事で許して貰えませんかね。 > <

本当に読んでくださっている方々には感謝しています。これからも
温かい目で見えて貰えれば幸いです。 ^^

く連れ去られた少年く

俺は一体何が起きたのかわからないまま。

莉緒と名乗る美少女が呼び寄せたメツチャ長いリムジンに半ば強引に乗せられ連れて行かれた。

これって軽く拉致じゃないの？とか思いながら、リムジンが止まった先は、でっか～～～～いお屋敷だった。

辺りは絵に描いたような赤や黄、青、紫といった色とりどりの花が咲き乱れる庭園があり、屋敷の周りには塀のような高い壁がある。

なんじやりや～～！！！と思ったが先程の路地で莉緒が両親の遺産を継ぎ大金持ちであることを知っていた俺はあまり驚かなかった。

少女に案内されて屋敷の中に入ると、一人の執事服を着た白髪頭のおじさんが、「お帰りなさいませ」

と丁寧にでむかえたので俺は少し戸惑った。なにせ本物の執事を見るのは初めてだからな。

少女は執事がそんなに珍しいのか？と首を傾けながら。客間に俺を招き入れた。

いかにも高そうな本皮のソファーに座る俺。俺の正面に座る少女。

そして先程の執事が部屋に入ってきて、淹れ立ての紅茶を差し出し

てきた。

俺は軽く「ありがとうございます」と会釈すると、執事の人が対面の少女に聞こえないように

「莉緒様が友人を連れてこられたのは初めてです」と笑顔で囁いて軽く一礼して部屋を出て行った。

執事が部屋から出て行き二人だけになった客間で、一人紅茶を飲む俺の姿を凝視しながら終始笑顔の莉緒は、いきなり立ち上がって俺のほうに寄ってくる。俺の横に座ると莉緒が甘えた表情で、抱きついてきた。

「うつ・・・うわああ！！・・・一体なにを？」

いきなり抱きついてきた莉緒を引き剥がすと莉緒は上目使いで見つめてくる。（ヤバイ、まじでカワイイ

「さっきも言ったじゃないですか。私と結婚してくださいって。」

嘘だ。これはきっと何かの冗談だろう。よしホッペを抓ろう。そうしよう。

おもいつきり自分のホッペを抓る悠。痛かったさ、本当に。

あまりにも強く抓りすぎてホッペがジンジンと赤く腫れ上がる悠。

それを横から見ていた莉緒はクスクスと笑い、悠のホッペに手を添える。そして・・・ぺろっ

舐めた。

「うわあああああああ!？」

悠の悲鳴にも似た叫びが客間に響き渡る。

そう、莉緒は悠の赤く腫れあがった頬を舐めていたのだ。

悠の頬はあまりの出来事に真っ赤に染まっていた。

もう何処が腫れていたのかわからないほどに真っ赤に染まった頬で悠は、気を取り戻すために、彼女に

事情を話すように促した。

く連れ去られた少年く（後書き）

いやく毎度のことながら本文短くて本当にスイマセン。なにぶん作者自身が文才に乏しくてうまく表現できないんですよね^^：ハアく

後々にわかる主人公のチート能力はもうしゃれにならないレベルにしようと思っています。

友人達に超能力としてどんなのがチートかなって聞いて回ったんですが、時間を止める能力だとか不老不死とか光を操るとか、よくありそうなのばっかだったんであまり参考にならなかったんですよね。
^^：

今後の設定は大方決まっていますが、できるだけオリジナリティを出せるように頑張りたいです。応援よろしく願いします。><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8885i/>

希望の果てに・・・

2010年10月14日19時57分発行